

その十 黒馬大池

昨夜九時頃、俺と守は大阪を出発した。名神高速の春日井インターから国道十九号線へ。そして松本へ。運転を交代しながら仮眠したが今は糸魚川街道を走る。初夏の朝は早い。中央アールプスが朝日を浴びて大あくびする。大阪を出るとき買ったパンをかじりながら信州黒馬岳麓クロウマダケフミトの別荘を目指す。

体調が優れない社長——守モリの父親が夏を別荘で過ごすことになった。もちろん生活に必要なものは揃っているが、母親の要望ですべて新調した。今回は使い慣れた小物を運ぶのが目的だ。俺は守モリの両親からも信頼されている。ただ、目に掛けてもらおうと思つた事はない。すでに十分、恩恵を受けた。でも熊本以来、守モリとは気まずさが続いていたので、この仕事？ と言うか今回の別荘行は気乗りしなかったが表向き喜んで引き受けた。

俺は結婚話について一切触れなかったし守モリも黙つたまま。烏来ウライの件についても同じ。今の守モリには親友にも言えない悩みがあるのは分かっている。俺が絡んでいることも間違いないが、心当たりがないので対処のしようがない。

「黒馬別荘」と書かれたアーチをくぐり抜けて守家モリの別荘に到着する。守モリがクラクションを鳴らすと二階のベランダに人影が現れる。

「おい、誰かいるで」

私的な事ゆえ社員を動員する事は、俺を除いて……ないはずと目をこらす。

影が姿になる。何と！ 美英子と上町ウエマチがいる。車を降りると頭上から大きな声がする。

「マモルー！ ごめーん。ごめんなさーい」

俺は腰を抜かす。みんなの前で「マモル」と叫ばれた。

ピンクのチェックのブラウスに長めの赤いスカート。モダン・バレーで鍛えた足首は細い。片手を振つてもう一方の手で首からぶら下がるハート型の宝石を摘まみあげる。

「これ、すごーく気に入ってんの。お風呂も一緒よ」

いきなり先頭打者ホームランを打たれた。横で守モリがなんとも言えない表情で美英子と俺を交互に見つめる。

「いい雰囲気や。羨ましい」

二人揃って降りてくる。驚いた事に美英子は俺の手を引いて部屋を案内する。これでは今さらプレゼントの礼がなかったことにクレームを付けることはできない。そもそも美英子は礼を忘れるのが得意なのかも知れない。

「見て、見て。完璧でしょ」

この言葉に驚く。何故こんなセリフを俺に吐くのか。連続ホームランを狙っているのか。「守モリに言えよ」

守が頭を下げる。

「ありがとう。安心して社長が夏を越せる」

事務的な言い方に驚く。美英子も守も何か芝居がかっている。確かに別荘の中はすべてが整然としていた。持ってきた荷物は置くべき所に置くだけですぐ片付いた。

昼まで時間があるが腹が空いた。守が上町に尋ねる。

「何か食べるもの、ある？」

「インスタント・ラーメンぐらいしか……何か買ってこようか？」

「じゃあ、頼む。それまで我慢する」

守が上町に千円札を二枚渡す。早速上町の運転で二人は食材を仕入れに別荘近くの万屋よろずやへ向かう。活発な美英子だが運転免許を持っていない。近眼が原因かも知れない。

食堂のテーブルに座ると守はいつもの物腰の柔らかい口調で弁解を始める。

「掃除や整頓を上町さんに頼んだだけ。一人でと言うわけにも行かないから、友達を連れてきてもいいと言う条件で。そしたら……」

「ここに来るまで、上町や東山のこと……」

「上町さんが、誰を連れてくるかまでは聞いてなかった。下村さんかなあと思ってたけど。まあ、東山さんで正解やった」

「なんで上町に頼んだんや」

「摩周湖で出会ってから、何かにつけ手伝ってもらってる。気心知れているから重宝する。言
ったことなかったか？」

持って回ったような守^{モリ}独特の言い回し。確かにコンサートでも上町がいたが美英子もいた。
「始めて聞いた」

「今はアルバイトやけど、本人さえ良ければ正社員にしようかと思ってる」

——ひよつとして結婚相手は上町？

「東山もか？」

「それはない」

追求を辞める。意味がない。

「東山さんと最後に会ったのは去年の秋やと言うけど、本当はよく会ってるんやろ？」

「何回も言うたやろ。京都が最後や。ウソついて何になる」

「ウソや。『マモル』って呼ぶわけないやろ」

「それは……よー分からん」

「上町さんの誘いに乗った意味やつと分かった」

違和感を覚えたので流す。これ以上会話を続けても俺には何がなんだか分からない。

——美英子は洋装店の仕事、やめたんやろか

沈黙の気まずさを埋めるためではなからうが、意外と早く二人は戻ってきた。美英子が袋を

テーブルに置く。

「田舎のお店やね。食料品は昼からなんやて」

取り出したモノを見るとやたらと菓子が多い。あとはおにぎりとお卵と豆腐ぐらい。それに新聞。

「ワタシ、料理、ダメやから、美英ちゃんに任せるね」

相変わらず日焼けした黒い顔の上町が逃げる。

「ズルイ。でも材料が……」

冷蔵庫の中を見てから美英子は玉子焼き器とヤカンを火に掛ける。ボールに左手片手でいくつかの玉子を割りながら右手で素早くかき回す。そして玉子焼き器に油を引くとその煙の具合を見つめる。しばらくすると「ジュッ」という音がする。

俺は本心確かめるために何食わぬ顔をして新聞を広げて声を掛ける。

「京都の弁当、最高やった！あの感動をもう一度！」

「任しとき。料理には自信とホコリを持つてる。たまにフケも入れるけどね」

「フケ？」

「冗談、冗談」

目に飛び込んだ記事を読み上げる。

「大阪で、食中毒……」

「イヤミ？」

「冗談、冗談。ところで、何を食べさせてくれるんや？」

「とりあえず……おにぎり」

「おにぎり？ それだけ？」

「卵焼きと冷や奴……湯豆腐にしよか？」

「他には？」

「おにぎりに海苔ノリ、巻いたげる」

「そんなん料理と違う」

「じゃあ、もう一品、リクエストして」

「メザシ！」

「ハズレ。味噌汁！ 特上のインスタント味噌汁。熱湯よりアツくいウチの情熱、注いたげる」

「えー。それって朝定アサダイやんか」

「そうや。まだ昼になってへん」

守モリが腹の底から笑うが、距離感を埋めるほどではなかった。

「漫才や。息が合ってる。やっぱり、よう会オうてるんや」

*

車で黒馬大池に出かけた。大池駐車場からカミソリの刃のような足元が悪い尾根道を登る。

冬はスキー客で賑わうが今は閑散としている。

「ねえ、本当は何歳やの？」

美英子は食後にしたトランプ占いが頭から離れない。

「上町さんらと同級生やから皆、同じ学年やけど、歳は俺だけ二十三」

たわいもない恋占いだった。自分の年齢と好きな相手の年齢や名前の文字数などで恋愛度を占う。その時、美英子はひどく年齢に拘った。

「そんなん、あり得へんやんか。確かに同級生でも同い歳とは限れへん。留年したら年上や。

なんでマモルだけが二十三やのん。中学生……まさか小学生の時、落第か留年したん？」

「両方や」

「えー！ ほんまに！ 小学生で！ 信じられへん」

大人に見せたかったので突拍子もないウソをついた。すると美英子も突拍子もない宣言をする。

「マモルの年齢不詳につき、ウチ、この占い、棄権する」

うれしいけど「なんでや」という疑問が込み上げる。

もう一つ引つかかる事があった。守は棄権しなかったが、恋人を春夜とすれば年齢プラス名前の文字数の合計が合わない。だから春夜ではない。もちろん上町でもない。他愛もない遊びだからどうでもいい……と言うわけにはいかない。気になる。

もう彼此三年以上も前になるが、丁度俺が夏子に熱を上げていたころだった。「春夜とキスした」と興奮した守の顔を思い出す。まさしく似合いの恋人同士だった。ところが最近どころかかなり前からコンサートを除いて春夜を見かけたことがない。それにもうコンサートはない。——いったい結婚相手は誰や

凸凹道なので美英子は喋らずに歩く。振り向くと片笑窪が愛くるしい。

——俺の事、気に掛けてはいるけど……

しかし、俺以上に守のことを気に掛けている。でも春夜のことまでは知らないだろう。いや、詳しいかはどうかは別にして神戸のコンサートで守と共演した春夜を知らないはずはない。演奏会も今回も上町の誘いだったとしても守に会えるから引き受けたに違いない。

黒馬大池が見えてくる。元々火口だったこの池は長軸三百メートル、短軸二百メートルほどの楕円形で周囲は一キロメートルほど。半分以上が切り立った崖に囲まれている。周りを高山植物の可憐な花が咲き乱れる美しい池だ。守と上町はすぐ後ろを歩いているが、とても恋人同士には見えない。やはり思い過ごし。

「守君はお兄さんって言う感じやね」

次期社長としての守はそれなりの立場がある。高校時代から絶えず会社の事を考えてきた。しかも、多彩な趣味、そのいずれもプロに近い腕前を持つプレイボーイだ。美英子を含め誰もが守に引かれるのは不思議でもなんでもない。

長袖のグレーのシャツにライト・ブルーのジーンズの美英子が何とかついてくる。やがて鮮やかなブルーの黒馬大池の全容が見えてくる。疲れたのか立ち止まると大池を眺める。

「フー。キレイ」

少し戻って一緒に眺めてから手を差し出すが、意外にも拒否される。

——別荘に着いたとき握ってきたのに

美英子が一步踏み出した時、右足下のサッカーボール大の石が転げ落ちる。「バシヤーン」という音を残して水中に消える。

「危ない！ 落ちたら死ぬで」

もう一度、手を差し出す。今度は首を横に振らない。俺が足場にした大きめの石が動いたので「踏むな！」と注意する。俺の手を握るとすぐ横に体重を掛ける。その瞬間「キヤア」という悲鳴をあげる。美英子の身体が大きく傾く。咄嗟にもう一方の手首を掴むが逆に引っ張られる。意識することなく抱きかかえると、できるだけ遠くに飛ぼうと渾身の力を込めて地面を蹴る。

一瞬の出来事だった。何とか崖に引っかからずに飛び込めた。水面に顔が出る。手は繋がったままで美英子はうつ伏せで浮いた。

——マズイ！

扇状に広がる長い髪をわしづかんで頭を持ち上げるが、身体が思うように動かない。靴を脱

ぎながら目線より少し高い岩場を見つける。頭が沈まないように抱きかかえて岩場に近づく。手前で膝の上に美英子を乗せながらシャツを脱いで左手に絡めて出っ張った岩を掴んで右手を美英子の脇に通して這い上がる。そのまま引つ張りながら左手をもう一方の脇に通す。

——重い！

何とか引き上げた。息が上がるが踏ん張る。左腕を首の下へ入れて頭を低くしてやる。乱れる呼吸が邪魔して息を確認できない。鼻を掴み口を押し開ける。半分開いているのに固い。息を大きく吸って唇を重ねて吹き込む。食べたモノが濁った水のように吐き出される。慌てて顔を横にさせる。何とか逆流を防いだ。口内に残る異物を吸いあげる。強い酸味が口の中に広がる。

再び息を吹き込む。胸が膨らむ以外反応はない。俺の方が続かない。少し間を置いて水を吐き出す。横になっているからそのまま流れ出る。呼吸を止めて胸に耳を当てる。わずかだが胸が膨らみ縮む。

——息、している！

力が抜けてへたり込む。

「息してるか！」

振り返るとボートで守が側まで来ていた。勇気づけられるが頷くだけでゆがんだ愛想笑いしかできない。

「心臓マッサージ！ 裸にしろ！」

ところが水を含んで黒く見えるシャツが身体に密着して脱がせない。少しずつずらして首元まで上げたが花柄のブラジャーに躊躇する。

「ブラを外せ！」

ここまでは何も考えずに何の邪念もなかった。ブラジャーの上から胸を押すが力が入らない。「ブラを外せ！ 恋人やろ！ 外して両手を組んで押せ！ 強く、強く！」

いつの間にか守が横に来て上着を脱いでシャツも脱ぐ。

「それじゃダメや！」

守はためらわずにブラジャーのホックを外して俺を押しつけて胸を力強く押す。

「シャツで顔を拭いてやれ。髪の毛を絞って……」

守のシャツで美英子の顔をていねいに拭いて髪の毛を絞る。

「ジーンズ、下げる！ 腹回りを楽にしてやれ」

しかし、前ボタンが外せない。ライトブルーのジーンズが濡れて濃紺に変わったせいかわエストを締め付けているように見える。しかも力が抜けているので腹回りが膨らんでいる。守は美英子の胸をつぶすぐらい押し続ける。

「上にずらせ」

そのとおりにすると簡単にボタンを外せた。今度はブラジャーと同じ花柄のショーツが現れ

る。腹回りが楽になったのか、美英子は目を開いて途切れた声を出す。

「モリクン……ア……アリガ……トウ……マモ……ワ」

目を閉じる。

「もう、大丈夫。交代しよう」

さすがに守の息も上がる。俺は見よう見まねで美英子の胸を押す。守がフーツと息を吐く。

「ボートがあつて助かった。上町さんに助けを呼びにやらしている。今頃、駐車場から……オ
イ！ 脇腹、血だらけやないか！」

守が俺の腹に触れる。痛みはないが美英子を岩場に引き上げる時に無理したのだろう。結構
広い範囲を擦ったうえ上半身に力を込めたから出血が止まらなかったのかも知れない。押す手
を止めて脇腹をさする。

「代わろうか」

守が俺の横でひざまずく。

「痛くない。続ける」

再び胸を押そうとするとしつかりと呼吸を始めた。

——良かった！

首にはハート型の宝石が輝いていた。